

銘柄分析レポート：四季報新春号の注目銘柄

1 はじめに

依然として日経平均は高値圏にあるものの、二極化相場の継続により、買われている株とそうでない株の銘柄間格差が開きつつあります。

また昨年11月の終わりから12月の初めにかけて、新安値銘柄が相次ぎました。

そんな中で、12月15日に発売された会社四季報新年号を通読してみたところ、PER1桁の銘柄がゴロゴロしている状況です。

まるでバリュー株天国で、絶好の投資チャンスに思えます。しかしながら、あまりにも割安株の多い状況が逆に引っ掛かりました。

足元の企業業績は、コロナの影響を受けている一部の業界を除いて、絶好調の会社が少なくありません。

ひょっとすると2022年3月期のEPSがピークになるかもしれず、株価が今後の収益低下を織り込んで下げている可能性も否定できないわけです。

実際に投資に当たっては「その企業が今までのペースでEPSを伸ばせるのか、たとえ不況が訪れても足元のEPSを維持できるのか」を検討する必要がありますでしょう。

企業収益には波があります。あのトヨタ自動車でさえ、リーマンショック後の2009年3月期は赤字に転落したのです。

今回の銘柄分析レポートでは、収益の安定性を加味した上で、四季報新春号の注目銘柄を取り上げました。